結び

第Ⅲ部　わが国における仏教図像と経典

第 1 章　中宮寺天寿国繡帳と『法華経』

中宮寺の天寿国繡帳に見出される天寿国について、各所説が、極楽浄土，妙喜浄土、兜率天浄土、霊山浄土、十方の浄土、此土の天竺等に分かれる中で、全体を包含する『法華経』で見ることを解明の糸口とした。また新旧二帳ある天寿国繡帳のうち、鎌倉期の新繡帳で、用語において『法華経』と結びつく特色をあげ、その結果、現存の 6 断片のいずれも『法華経』品々で解明できることを明らかにした。内容は以下の通りである。

上段右；蓮華に化生する菩薩と、左下部にある連珠文の折れ曲がる部分にヒントを得て、『法華経』結品の普賢品第 28 による考察が可能であること。

上段左；図中の月にヒントを得て『法華経』薬王品第 23 の月天子を割り出し、この薬王菩薩にあてた。このほか右上の鳥が『法華経』法師功徳品第 19 の迦陵頻伽鳥に、亀甲は『法華経』妙荘厳王品第 27 にいう一眼の亀にあたる可能性を指摘した。

中段右；『法華経』妙荘厳王品第 27 の二王子の現じる神変の様子で、像下に跪拝する三人は、仏所に詣でる夫人と二子、右端に青蓮華、在俗人物は襲（おすい）を着ける夫人や女子などとした。

中段左；中央の執金剛神は『法華経』観音品第 25 の観音三十三身の最後に示される姿で、像下の水や波は海上で遭難し助かる話に結びつくこと。左上方の三比丘と香炉は『法華経』法師功徳品第 19 の、懐妊した女性が安楽に福子を産む場面を想定できること。

下段右；鐘をつく僧と蓑を着て歩む人物は、『法華経』提婆品第 12 の王位を捨てて出家して鐘をつき仙人に法を求める過去世の釈尊の姿として理解でき、鎌倉期の曼陀羅の図像がこの参考になっている。

下段左；宮殿の中の人物と仏殿、持華の女性供養者。ここは『法華経』提婆品第 12 後半の龍女の即身成仏の話として理解でき、同じく鎌倉期の曼陀羅の図像が参考になる。

第 2 章　法隆寺夢殿八角円堂と本尊

敦煌第 61 窟五台山図に見える八角円堂について、わが国の奈良法隆寺における夢殿八角円堂との類似性に着目してその背景を探った。すなわち、五台山図の八角円堂は大法華之寺に所属する一院で、『広清涼伝』にいう神英和尚の法華院にあたること。わが国法隆寺の夢殿は、建立者行信とその信仰内容からみて法華経に関係すること。夢殿の本尊は手印から判断して太子を『法華経』安楽行品第 14 の転輪聖王に見立てた可能性があること。その後五台山においても、わが国も華厳思想の下で発展するが、ともに天台の影響を受けた法華経信奉の状況も続くことを明らかにした。

第 3 章　薬師寺東塔擦銘と本尊の『薬師経』

奈良薬師寺の東塔擦銘は、薬師寺の平城移転に伴う寺院の移建非移建論争において問題となったが、現在も奈良薬師寺の東塔擦管に刻入された状態で存在する。すなわち、擦銘は平城京で新たに建立された東塔に付けられたわけであるから、基本的に本尊も平城京において新鋳されたものとして考えるべきことを示している。しかしこれまでの論争の基底には擦銘が飛鳥藤原京において本薬師寺が存在した時点で、すでにその塔上に付けられていたという想定を基本としている。

科学的分析では、擦管上の水煙と現金堂月光菩薩の銅の組成が一致し、また現本尊薬師如来の台座内で発見された和銅開珍銭が文字の形態から見て、養老 4 年（720）を遡らない新鋳銭であると報告されている。したがって、これらは現薬師寺が移建されたものでないことを裏付けている。

本稿前段では銘文における和様化の要素を取り出して、銘文の誤字、模刻、配列の乱れなどを検討してその信憑性を明らかにし、現本尊について銘文にいう薬師如来が 4 種ある『薬師経』の隋訳に基づくことを明らかにした。後段では、縁起にいう薬師寺の第三本願に元明太上天皇をあてる説に対して、縁起の性格や文献による元明帝の動き、祭祀と比較した当時の仏教の位置づけなどを検討して、祭祀中心の遷都事業をすすめた元明帝が、そのまま仏教の薬師寺移転の完成者とはならないことを明らかにした。

第 4 章　法隆寺金堂四大壁画と経典

法隆寺金堂の四大壁画について、それぞれ経典の存在を確認し、一号壁が『無量義経』、六号壁が『観無量寿経』、九号壁が『薬師琉瑠光七仏本願功徳経』、十号壁が『観弥勒菩薩上生兜率天経』に拠ることを明らかにし、加えて制作年代の推定に及び、西暦 707～734 の間とした。

一号壁では、十大弟子の存在を通して、それにふさわしい経典として既に指摘されていた『法華経』序品よりも法華経の開経である『無量義経』に拠ることを明らかにした。六号壁では、観音の持つ手印に注目し、これを述べる『観無量寿経』を検討し、壁画上の九品の衆生それぞれを特定した。九号壁では、左端に描く執金剛神に注目し、薬師経の中の『薬師琉瑠光七仏本願功徳経』（七仏薬師経）を検討し、中に示す十二神将の半数が描かれているとの理解に達した。十号壁では、壁画に描かれた菩薩の頭冠などから、四菩薩、獅子座、五大神など、『観弥勒菩薩上生兜率天経』との関係を明らかにした。制作年代は、七仏薬師経が漢訳された 707 年を上限とし、袈裟のつり方に変化の見える興福寺十大弟子像の制作された 734 年を下限とした。

以上、第Ⅲ部第 1～2 章で、現在 6 つの断片として遺されているわが国中宮寺の天寿国繡帳が、他の図像表現との類似性からみて『法華経』品々で読み解けること、また法隆寺夢殿が本尊とともに『法華経』に深く関わることを明らかにした。

第 3～4 章では、薬師寺の東塔擦銘の検討から本尊薬師如来の典拠を隋訳『薬師経』に求

め、法隆寺金堂の四大壁画については、各壁の画像の主題がそれぞれ個別の経典に基づくことを明らかにした。

したがって、この第Ⅲ部では、わが国の場合でも図像と経典の双方が密接に結びつくことを示したわけである。